

本校の地域連携・地域交流

富士吉田市立下吉田中学校

共に学び支えあう教育

～高校生ボランティアによる学習支援活動～ 近隣高等学校との連携

1 目的と経緯

- ・中学生の学習に対する意欲・関心を高める。
- ・年齢の近い高校生による学習支援を受けることにより、学ぶ楽しさを深める。
- ・高校での学習と生活について意識し、進路や自己の生き方を考える機会とする。
- ・地域貢献（ボランティア）活動やインターンの一環として実施し、高校生の人生設計の一助とする。
- ・新型コロナウイルス感染症により中断したが、令和4年度より交流を再開している。

2 内容 ※令和6年度の取組について

- ・2月下旬に実施する学年末試験に向けた学習会に、高校生がボランティアとして参加し、1年生と2年生に対し学習支援を行った。
- ・高校側と日程調整を行い、予め高校生が来校する日を生徒に通知した。
- ・令和6年度は、2月18日・19日の2日間で実施した。
- ・生徒が疑問に思ったことを質問し、高校生がアドバイスする形式をとった。
- ・主に、教育系への進学を考え、かつ進路が決定している高校3年生が参加。
- ・ボランティアの人選は高校が行い、本校出身ではない高校生が参加することもある。
- ・令和6年度は、8名程度の高校生が参加し、2つの学年に分かれて中学生を支援した。
- ・支援の方法や割り振りは、学年の教員が生徒の実態や要望に応じて決定する。
- ・高校生と事前にボランティアとしての「心得」を共有した。

（例） 服装や言動にはよく注意し、規律・節度を守る

校内の秘密に関する事項を、外部に漏らさないように十分留意する

3 成果と課題

- ・年齢が近いため、多くの質問が出され、双方にとって価値のある関わりができた。
- ・試験前という時期もあり、今年度も多くの生徒が参加した。
- ・中学生にとっては、数年後の姿をイメージすることにつながり、良い刺激となった。
- ・限られた時間であるため、全員を支援するには至らなかった。
- ・事前調整等、準備にかかる負担が大きいため、持続可能な取組のあり方を検討する必要がある。

本校の地域連携・地域交流

富士吉田市立明見中学校

明見地区に根ざした教育の推進 ～ 平成3年台風12号明見地区災害から学ぶ ～

1. 目的と経緯

- ①明見地区の災害を知り、命の大切さや復興していく地域の人々の絆と力を学ぶ。
- ②平和を幅広くとらえ、身近で起きた自然災害の学習から、「身近にある平和とは何か」を考える機会とするため、10年以上行われている。

2. 内容

- ①明見在住の ふなくぼ ひで 舟久保 英 さんを講師にお迎えし、過去の台風災害と命の大切さや地域の人々の絆についてお話を伺う。
- ②関連して、明見出身で、世界の舞台で活躍しているアスリートを紹介していただき、自分の目標に向かって、一生懸命努力している先輩の姿から、「夢や目標」につながるキャリア教育の視点でお話を伺う。



3. 成果と課題

- 「災害は突然やってくる。準備しておけば助かること」、「てんでんこ という言葉から、自分の命は自分で守ることが、隣の人々の命を守ることに繋がること」を教えていただいた。
- 講話から、地域の温かさを感じ、生徒の学び（教員の学びにも）につなげられたこと。
- ▲学校と地域の連携により、「地域にある学校」の具現化につながることから、この取組を継続させることと、また今後、地域資源を意図的に教育課程に取り込むこと。



本校の地域連携・地域交流

富士吉田市立吉田中学校

1 学年校外学習を通じた地域連携

～富士山学習の一環として、富士登山を専門家とともに行う連携～

1. 目的と経緯

本校では、富士吉田市が推進し、本校の特色としている「富士山学習」の一環として、R5年度から1学年の校外学習として「富士登山」を行っている。この取り組みには、富士山に赴いての体験活動を通して、富士山とその周辺地域の自然の理解を深めることや富士山が火山であるという認識を深め、火山防災を考える学習につなげることが目的となっている。また、中学校に入学して間もない1年生が、学年・学級の活動を通して、中学生としての集団づくりの基礎を培うことも目的の一つとしている。

2. 内容

1学年の生徒が、担任や学年職員などとともに、富士宮五合目から宝永山火口縁を上がり、富士山六合目の宝永火口の上部を目指すルートで登山を行っている。登山前には、事前学習として、マウントフジトレイルクラブの代表・太田安彦さんに富士山に関することや登山中の注意などをお話しいただき、登山当日は太田さんをリーダーに、各クラスにお一人ずつのサポートを受けながら、安全に登山を行っている。登山中は、マウントフジトレイルクラブの方々の登山に関するレクチャーを受け、自然に親しみながら、登山を楽しむことができています。



3. 成果と課題

- ・コースについては、体力差のある一学年生徒には、適切な難易度であり、さらに防災・火山という視点で富士山の学習を深めるのによいコースとなっている。
- ・吉田口の登山道を小学校の時に経験しているため、富士山を多面的にとらえるためには、静岡側からのアプローチがよい視点となっている。
- ・マウントフジトレイルクラブの代表・太田さんから直接お話しいただいたことで当日が楽しみになったり、当日の注意事項にもつながったりしていて、外部機関との連携が生徒たちのよい体験につながっており、せいかなっている。
- ・5月下旬の富士山は、まだ寒さを感じることもあり、設定時期の難しさがある。また、トイレの設置場所が限られており、学校で簡易トイレを持参しているが対応の難しさを感じている。



本校の地域連携・地域交流

富士吉田市立富士見台中学校

命を守る教育（消防署と連携） ～ 全校救命救急法学習会～

講 師 富士吉田消防署より6名
西桂分遣所より3名 計9名の消防員



目 的 ①万が一に備えて、心肺蘇生法や AED の使い方など、緊急時に正しい対応ができるようにする。

②事故や急病などの際に冷静に判断し、迅速に行動できる力を養う。

経 緯 今までは職員を対象に行っていたが、今年度から全職員と全生徒で行った。

内 容

本校体育館で保健委員会の生徒による進行で行った。最初は、応急手当の目的や必要性などの講義を受け、その後、生徒7班、教師2班に分かれて、それぞれ消防員の指導による基本的な心肺蘇生法やAED、エピペンの使用方法について実習を行った。最後は生徒と職員の代表がみんなの前で、傷病者発見から一連の流れを行った。特に119番通報では、シミュレーションとして、消防本部に通報し実際のやりとりを経験した。

成果と課題

ほとんどの生徒が初めての体験であり、若い教師も多く、みんな真剣に消防士の話を聞きながら取り組んでいた。今回学んだことで実際に目の前で起こったときに役立つのではないかと思う。

今回は9名の消防員に来ていただいたが、同じように派遣していただけるかその時によってわからないことが予想される。



本校の地域連携・地域交流

都留市立都留第一中学校

学校教育目標「自ら学ぶ 心豊かな生徒の育成」実現のために、地域連携によって学校での学びを社会と結びつけ、生徒のより意欲的な学びへとつなげていくように方向付けていく

1 経緯

地域連携事業として実施してきた活動と将来性、教育効果、教育課程との関連を検証し、次年度へ負担感無く、教育効果を上げていけるように引き継ぐことを検討してきた。地域や行政からの要請・学校の裁量で始めたもの様々であるが、実施したことで教育効果があったものや、改善が必要なものもあった。4月に職員全体で合意形成を行い、教育課程の中で年間活動に位置づけ、計画的に実施していくことを確認した。また、今後、CSに組み入れられていく可能性もある事業もあり、これらのノウハウを蓄積していくことでスムーズに移行していくことも視野に入れている。社会に開かれた教育の実現のため、学校ができることの最適化・最大化をめざしていきたい。

2 持続可能となる視点

学びの質をあげ、子供たちにとって教科書の教材（教育課程で学ぶ内容）が身近になり（実際の生活に役立つ学習となり）、教育が保護者、子供たちにとって関心の高い内容になることを目標にして、学校と地域が子供を育てるために連携する。子供に好影響を与えることのできる機会や人を引き合わせる仕組みを創っていく。

3 長期的な視野での計画

年間の教育課程の中で学校目標達成のために必要な具体的取り組みをピックアップする。

「だれが、なにを、いつまでに、どのように」行うのか学校の教育課程内の中で役割を分担し、PDC Aサイクルを繰り返す中で持続可能な取り組みとしていく。しかも、楽しく、無理することなく、欲張りすぎずに。生徒の成長に合わせ、「3年間を通して」の活動または「〇年生の△学期をめざして」のように短期、長期のバリエーションを持たせ、無理をしすぎないように心がける。

苦情を言うのではなく、協働していく意識を醸成していく…そのため年度末の検証と年度始にある程度の周知期間がないと、急な企画は疲労感があるので避けるようにした。

4 持続可能な取り組みにしていくために

生徒達の学びの新たな形をつくっていく。活動の中心は生徒。学校だけでは実現できない教育を創りあげていく。地域の教育力を学校教育に取り入れる。教員の働き方にも好感の持てる内容にしていく。地域住民、連携する団体、保護者も含め、参加意義のある事業、当事者意識を育む。（目的意識を持った人たちが構成していく）

R7年度日程【確認済み】	内容
6/9⑤⑥	あすチャレ！スクール（ゴールボール）
6/18⑤⑥	学校ブライダル事前指導
7/10⑤⑥	学校ブライダル当日（うぐいすホール）
7/10⑤⑥	富士学苑高校ジャズバンド部交流
7/14④⑤	都留興譲館高等学校 出前授業①（教員）
7/14 放課後	文芸部ペン立て寄贈（都留市役所など）
夏休み8月上旬	生徒による小学校への出前講座（SEC）
8/4～8	学力向上フォローアップ ○教員補助員・学習支援スタッフ ○学習院大学学生
9/16 放課後	谷村第二小学校ソーラン節講師（ソーラン隊6名による）
9/24⑤	
9/19⑤⑥	都留文科大学体験授業
9/19⑤⑥	産業技術短期大学校体験授業
9/23PM	開地保育園交流イベント参加（ソーラン隊代表10名・吹奏楽部）
9/24⑥	老健つる交流訪問

9/25⑥	弁護士による講和 身近な平和～いじめについて考える～
10/21②③	青藍幼稚園交流会
10/30⑤⑥	都留興譲館高等学校 出前授業②（生徒）
10/31②休	中学校へのハロウィン訪問
11/6⑥	デフリンピック代表 藤本六三志さん講話
事前 11/5	モールドモデル 地域企業訪問
本学習 11/18	ものづくりの現場を通じた地域の再発見
事後 12/9	工場見学・職場体験・地元産業の魅力を体感
11/17・21②③	開地保育園 保育実習
11/19PM	ファナック工場見学
12/4⑤⑥	認知症サポーター養成講座
12/17⑤⑥	子育て支援課 赤ちゃん抱っこ体験
3/3, 5	生き生き地域人材活用事業（合唱指導）
	水素の出前授業
実施なし	警察講話
実施なし	ファナック出前授業
	ソーラン節交流（2/22 うぐいすホール）
	第一生命出前授業

テーマ：We Love 東桂！

1 目的と経緯

東桂地域は、豊かな自然、歴史、文化、そして地域の人々の温かいつながりに支えられてきた。こうした地域資源を教育に生かし、生徒がふるさとへの誇りと愛着を育みながら成長できる環境をつくるため、令和7年度より総合的な学習の時間を「東桂学習」と命名した。「地域に出る！地域を招く！地域とともにある学校！」を合言葉に、学校・家庭・地域が協働して学びを創る体制づくりを進めている。

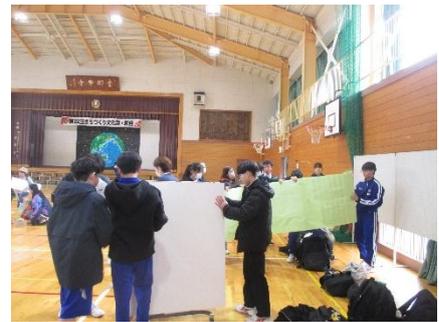
また、令和7年度からはコミュニティ・スクール（東桂小中学校運営協議会）が始動し「保・小・中と地域のつながりで創る東桂教育」の実現を目指している。

2 内容

東桂中学校では、「地域に出る！地域を招く！地域とともにある学校！」の理念のもと、まちづくり文化祭・東桂への参画を軸に、地域と共生する学びを進めている。

(1) まちづくり文化祭・東桂への参画

生徒は文化祭の準備・運営・片付けを担い、地域の方々から実務的なノウハウを学びながら、地域行事を支える役割を果たしている。発表では応援・ソーラン・合唱を披露し、合唱については事前に地域へアナウンスを行い、地域の方々とともに歌う「心をひとつにする瞬間」を創り出した。文化祭を「発表しに行く」だけでなく、「共につくる」立場として参加することで、生徒は地域の一員としての自覚を深めている。



(2) 地域と共生する学校づくり

学校運営協議会の熟議や文化祭の準備会段階から生徒が参画し、地域の大人と協働して企画を進める取り組みを行っている。生徒が社会とかかわりながら学ぶ機会を増やし、学校が地域社会の一部として機能することを目指している。地域の方々との対話や協働を通して、地域の課題や魅力を知り、地域の未来を考える視点を育む学びとなっている。

3 成果と課題

〈成果〉

- (1) 地域の大人と関わる機会が増え、生徒の主体性・協働性・コミュニケーション力が大きく向上した。
- (2) 地域の魅力を再発見し、ふるさとへの愛着や誇りが育まれた。
- (3) 地域行事に参画することで、生徒が「地域の一員」としての自覚を高め、地域からも学校への信頼が深まった。
- (4) 合唱を地域の方と歌うなど学校と地域が心を通わせる新たな文化が生まれた。
- (5) コミュニティ・スクールの始動により、学校と地域の連携がさらに強まり、東桂教育の可能性が広がった。



〈課題〉

- (1) 活動の時間帯との調整が必要で、活動日程の設定に工夫が求められる。
- (2) 活動を継続・発展させるため、学校として地域との連絡体制や企画準備の仕組み、カリキュラム・マネジメントによる社会に開かれた教育課程をより整えていく必要がある。

職場体験学習の実施 ～地域と共にあるキャリア教育の推進～

道志村立道志中学校

1. 目的と経緯

本校では、学校教育目標「社会に貢献しながら、自立する生徒の育成～気づき、考え、実行する～」の実現に向けて、3年間を見通したキャリア教育を進めています。その中核となるのが、1・2年生を対象とした職場体験学習です。

この取組は、生徒が実際の職場で働く人々の指導を受けながら体験活動を行うことで、望ましい勤労観・職業観を育むことを目的としています。また、地域の大人との関わりを通して、規範意識や社会性を高め、自らの力で困難や課題を乗り越える力を育む機会としています。

特に、「地域の産業やそこで働く人々の素晴らしさや大切さの発見」を重視し、郷土に対する愛着や誇りの自覚につなげることを目指しています。さらに、3年次に実施する「15歳の村への提言」につながる課題意識を育むことも、大きなねらいの一つです。

2. 内容

【期間】令和7年11月26日(水)から28日(金)の3日間

【事業所】道志村内の9事業所にご協力いただきました。

(製造業、観光業、行政、福祉、保育まで幅広い職種での体験が実現)

【事前学習】自己アピール書の作成、事業所への事前連絡(電話マナー指導含む)、オリエンテーション(服装、持ち物、心構えの確認)を行いました。

【体験内容】各事業所で、実際の業務を体験しました。各事業所の特性を活かした多様な体験ができました。生徒は記録ノートに気づきや学びを記録し、教職員が3日間巡回訪問して活動の様子を見守りました。

【事後学習】体験レポートの作成、お礼状の作成・送付、学習発表会を行いました。

3. 成果と課題

【成果】

まず、生徒一人ひとりが「働くことの意義」を実感できたことが大きな成果です。生徒の感想から、「自分にもできた」という小さな成功体験が自信につながり、「地域の大人に支えられている」という実感を持てたことが読み取れます。

次に、村ならではの近さが温かさとなって生徒を包んだことです。地域の皆様は生徒のことを、まるで家族のように迎えてくださいました。慣れない作業に戸惑う生徒に寄り添い、優しく声をかけ、できたことを一緒に喜んでくださる姿に、生徒たちは大きな力をもらいました。

さらに、3年次の「15歳の提言」につながる土台ができたことも成果です。実際に村の産業や仕事の現場を体験することで、村の課題や可能性を自分事として考える視点が芽生え始めました。

【課題】

一方で、小さな村ゆえの課題もあります。受け入れ可能な事業所が限られるため、生徒の希望と受け入れ先のマッチングに工夫が必要です。また、事業所の皆様には無償でご協力いただき、準備や指導の負担に対して、事業所の負担軽減に向けた連携の在り方が課題です。

今後は、2年間で2つの事業所を体験するカリキュラムの充実を図るとともに、3年次の「15歳の提言」との連動をより明確にし、村の未来を担う人材育成という視点を一層強化していきたいと考えています。



本校の地域連携・地域交流

西桂町立西桂中学校

1. 目的と経緯

本校は、町に一つの中学校として地域住民に見守られ、共に歩む教育を大切にしてきました。「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた地域連携・交流に加えて、生徒が地域課題の解決に参画し、地域の一員としての自覚を持てるよう取組を行っている。地域の人的・自然的資源を活かし、生徒が郷土を愛し、主体的に地域に関わろうとする態度の育成と、地域社会との相互作用を通じて、郷土愛を育むことを目的としている。

2. 内容

① 防災訓練

毎年8月末に実施される町総合防災訓練に全校生徒が訓練の一環として参加している。生徒は各自宅から地域の避難所へ避難し、消防団の指導のもと、放水・消火訓練や救助体験等を行っている。地域の一員として「自分たちの町は自分たちで守る」という高い意識を持つことができる。



② 歩け歩け運動

従来の強歩大会を町の行事である三ツ峠歩け歩け運動に統合し、全校生徒で参加している。新庁舎建設時には植林体験もさせていただいた。地域の方との交流を深めるとともに、町の自然や産業に直接触れることで、郷土への理解と愛着を深める貴重な機会となっている。



③ 三ツ峠八十八大師に供える前掛けの製作

高齢化に伴い製作が困難になりつつある地域の現状を受け、教育委員会からの依頼を機に2年生の家庭科の授業の中で製作している。地域社会の一員としてふるさとを支える心を育むことを目的としている。寄贈した前掛けは、文化財保護審議会の皆様が奉納してくださっている。生徒は「地域に貢献できて嬉しい」という感想を持ち、郷土を愛する心が育まれる大きな成果を得ることができている。



3. 成果と課題

地域との連携・交流は、生徒の地域社会を支える一員としての自覚と深い郷土愛の育成につながっている。今後は、学校運営協議会と連携し、「地域とともにある学校」を目指すとともに、生徒が豊かな学びの機会を持てるような教育活動を行っていきたい。

忍野中伝統のキャリア教育『職業講話』

～自らの生き方を主体的に創る進路指導をめざして地域を学び・地域の人に学ぶ～

1. 目的と経緯

- ・啓発的体験学習のひとつとして地域を学び、保護者や地域の人から学ぶ機会とする。
- ・主体的に学び、自分の将来や職業について考えるきっかけとする。
- ・今年度で29回目を迎える伝統行事である。



2. 内容



- ・様々なジャンルの職業から15講座前後開設し、90分の講義や実習を行う。
(今年度の開設講座は、警察官、美容師、医師、消防士、自衛官、パティシエ、アナウンサー、保育士、機械エンジニア、教員、住職、銀行員、研究員、食品業、スポーツクラブスタッフ)
- ・講師は、「地域に学び、地域の人に学ぶ」を基本にするため、村内在住者、村出身者、近隣市町村在住者を基準に選出する。(PTA役員が講師を選出し、依頼する)また、無償(ボランティア)でお願いする。

- ・全学年の生徒が参加し、自分の興味のある講座を選択し受講する。保護者の参観も可能。

3. 成果と課題

- ・生徒が自分の進路について考えるきっかけとなっている。
- ・働くことを自分の問題としてとらえ、考えられるようになった。
- ・講義だけでなく体験活動もあり、全員が興味を持って集中して学習できている。
- ・地域の方々と学校の交流の場になっている。
- ・講師の選定については、PTA役員にお願いしているが、職種の偏りや講師の方の人数など、難しさもある。
- ・生徒の選択肢を広げるために、できるだけ多くの講座が開設できるようにしたいところではあるが、担当する教員の数に限りがあるので難しい。



本校の地域連携・地域交流

山中湖村立山中湖中学校

地域のイベントへの参加・協力を通して ～山中湖ロードレース～

1. 目的と経緯

- ・山中湖で毎年5月に開催される「山中湖ロードレース」に参加、または協力することにより村民の一員であることを自覚するとともに、自分ができる方法でイベントの成功をサポートする
- ・山中湖ロードレースは、今年で45回目を迎える。開会当日は中学校の校庭、および体育館がメイン会場となる。そのようなこともあり、以前から中学生が大会ボランティアとして協力していた。



2. 内容

- ・中学生全員がランナー、または大会ボランティアとしてロードレースに参加協力をした。今年度は23名がランナーとして、残りの58名がボランティアとして活動した。
- ・ランナーとして出場する場合は、他の一般選手と同じコースを自分のペースで走る。大会ボランティアとして協力する場合は、プラカード係、クロック（手荷物）係、フィニッシュドリンク係、給水所係のいずれかの係を担当する。

3. 成果と課題



- 多くのランナーから感謝の言葉をかけていただくことで、生徒自身が自己有用感を感じることができた。
- 村の大きなイベントなので、多くの生徒が村への誇りと愛着感を育むことができた。
- ▲仕事内容に差があるので、人数配分などバランスを考えたい。

**地域と連携し、生徒の思考力・判断力・表現力の育成を目指して
～よのなか科の授業を通して～**

富士河口湖町立河口湖北中学校

1. 目的・経緯

「よのなか科」は、民間で初の校長、藤原和博氏が提唱する新しい形の授業。正解がないとされる課題に対し、「納得解」を考え、これからの時代を生きるために必要とされる「情報編集力」(身につけた知識や技術を組み合わせ「納得解」を導き出す力)を身につけることを目的としている。授業の特徴は生徒達の話し合いの中に大人が参加するところにある。この中から、生徒達は新しい視点を持つことが出来、話し合いを繰り返していく中で自らの意見を発信する力を身につけると同時に、「思考力」「判断力」「表現力」を養うことができる。

本校は、令和6年度に県の指定を受け、1学期に「よのなか科の授業」を7回実施した。各回の授業では、地域をはじめ、県内各地より参加者を募り、生徒と共に話し合いに参加してもらった。今年度は、対象の学年を全校生徒に拡大し継続して実施している。

2. 内容

《令和6年度》

5月29日(水)	1年	オリエンテーションとコミュニケーションの練習
6月7日(金)	1年	きみたちはどういう時代に生きるのか AIロボット時代になくなる仕事
6月12日(水)	1年	稼げる大人になるにはどうしたらいいか?～時給の比較
6月21日(金)	1年	人生のエネルギーカーブを描いてみよう 自分の人生をプレゼンする
6月26日(水)	1年	ハンバーガー店の店長になってみよう
7月1日(月)	1年	世の中にはどんな仕事があるのか? 13歳のハローワークマップより
7月8日(月)	1年	商売繁盛の方程式を作ろう

→全7回を藤原和博氏が授業者として実施し、各回地域の方などに参加者として協力をいただいた。

《令和7年度》

6月12日(水)	1年	自分と相手の共通点探し
6月18日(水)	1年	きみたちはどういう時代を生きるのか
6月25日(水)	1年	人生のエネルギーカーブを描いてみよう 自分の人生をプレゼンする
7月2日(水)	1年	稼げる大人になるにはどうしたらいいか
10月9日(木)	1年	ハンバーガー店の店長になってみよう
10月14日(火)	2年 3年	自殺抑止ロールプレイと自殺の是非のディベート 一票を投じるの意味
11月6日(木)	1年 2年 3年	世の中にはどんな仕事があるか 少子化問題を考える 安楽死問題を考える
11月17日(月)	1年 2年 3年	商売繁盛の方程式を作ろう 赤ちゃんポスト問題から、命について考える まちづくりのアイデアを提言しよう



→今年度は、本校の職員が主に授業者を務めた。(一部、都留高でよのなか科を担当している松田先生にお願いした)また、参加者には地域の方に加え、授業の内容によっては役場の職員の方にも参加者として協力をいただいた。

3. 成果と課題

地域の大人達が話し合いに参加し、その方々が生徒の考えを引き出す、またその考えは否定されないということから、生徒の安心感に繋がり、それが結果として生徒達に新しい視点を持たせるとともに関わりを深めていくことにも繋がったと考えられる。よのなか科の授業は生徒の思考力・判断力・表現力を高めるためには、一定の成果が感じられる。そのため、よのなか科の授業だけで終わらず、その手法を教師側が普通の授業にも取り入れていくことが重要と考える。

勝山中学校区 保小中合同引渡訓練

1 目的と経緯

- ・実践的な場面を想定し、保小中合同の訓練を行うことで、「より安全で確実な引渡方法」について教職員、保護者、児童生徒一人ひとりが自分事として考える機会とする。
- ・勝山中学校区の小中学校及び保育所(勝山小、西浜小、富士豊茂小、勝山中、勝山保育所、足和田保育所、富士ヶ嶺保育所)において、同時に引渡訓練を行う。R3年度より実施(保育所合同はR5年度から)しており、今回は、河口湖北中学校区の引渡訓練も同日に行われた。

【連携機関】

富士山科学研究所 富士河口湖町教育センター 学校教育課 地域防災課 子育て支援課
勝山中学校区小中学校及び保育所

2 内容

- ・勝山中学校区において合同の引渡訓練を行った。小中学校及び保育所において同時に行うことで、実践的な訓練となった。当日は、富士山研、教育センター職員が学校での様子を観察し、今後の検証に繋げた。また、防災アプリや行政無線による連絡を地域防災課で行った。
- ・河口湖北中学校区の合同引渡訓練も同日に行い、教職員自身の引取の動きも検討するなど、より実践的な状況を想定した訓練を行った。
- ・事前には富士山研が中心となり、学校、教育センター、地域防災課で検討し引渡マニュアルの見直しを行った。また、災害時における報告表「小中学校→学校教育課、保育所→子育て支援課」の確認を行った。



3 成果と課題



- ・兄弟の関係で引渡箇所が複数になってしまう家庭でも、混乱や大幅な遅滞なく引渡ができた。継続して行ってきたことで、保護者の中でも意識が高まってきている。
- ・隣接する学区と同日に実施できたことにより、より広域的な訓練となった。また、引渡をする側である教職員自身の家庭内の役割を確認する機会にもなった。
- ・行政(学校教育課、地域防災課)への情報伝達の流れを再確認できた。
- ・訓練への慣れもあり、緊張感を持たせる工夫や形骸化を防ぐ方法を検討していく必要がある。

地域人材の活用による体育科「体づくり運動」の充実 ～縄跳び（ダブルダッチ）を通して運動の楽しさにふれよう～

講師：谷澤潤（パフォーマー）・谷澤真衣（Dance School Stellar 代表）
安藤信義（JJRU 山梨支部）・安藤万実（Marola 新体操教室）

1. 目的および経緯

- ・体育授業における地域人材の活用の一環として、本校体育科「体づくり運動」の授業に、地域で活躍するプロのパフォーマーやダンサーを講師として招聘し専門的な技能にふれることで生徒の運動への関心を高めるとともに、生涯スポーツへの意欲を育む一助とする。
- ・身体能力の向上と運動の多様性、縄跳び（ダブルダッチ）特有の「調整力」や「敏捷性」に着目し、体の動きを高める運動とし、仲間とタイミングを合わせて跳ぶ活動を通じ、運動の楽しさを味わいながら心身の調和のとれた発達を図る。

2. 内容

(1)プロパフォーマーによるデモンストレーション・挨拶

(2)準備体操

(3)ダブルダッチ体験学習

- ・多様な跳び方への挑戦（体の動きを高める運動：調整力・敏捷性）
- ・チームでの連続跳躍（体力を高める運動：持久力の向上）
- ・チームワークを重視した運動
- ・声掛けとタイミングの同期（協調性を高める運動）

(4)まとめ・振り返り

3. 成果と課題

□成果

- ・地域人材の活用により、地域のスポーツの現状に触れ、生徒の地域に対する関心が高まった。
- ・指導者が地域の方であったため、その生き方を知ることは、生徒にとって将来を考える良い刺激となり、学習意欲も向上した。
- ・専門家による直接指導は、苦手克服と自己肯定感向上に繋がった。特にダブルダッチは調整力を高める好教材である。

□課題

- ・3クラス合同・2箇所分散は人数に対し待ち時間が多く、運動量の確保が課題となった。今後はグループ編成やローテーションを再考し、跳躍回数の増加を図る必要がある。
- ・1回限りの体験では技能の定着に限界があるため、年間計画の中に複数回の指導機会を組み込み、ステップアップした内容へとつなげていきたい。

